令和元年　8月27日

山王台だより9月号

横浜市立山王台小学校
〒235-0016
横浜市磯子区磯子5丁目2－1
TEL045（755）1107

【学校教育目標】自分のよさに気付き、相手の気持ちを大切にしながら、ともに高め合って生きる

父の墓前に平和を願う

校長　　志田　一彦

今年の夏も猛暑が続き、連日各地の最高気温がニュースとなる毎日でした。子どもたちにとってはどんな夏休みだったでしょうか。暑さに負けることなく様々な体験をし、かけがえのない思い出ができたことと思います。

毎年８月は、テレビや新聞等で太平洋戦争に関する特集を目にすることが多くなります。広島、長崎の原爆の惨状、極限状態の戦場、空襲や学童疎開、戦後の暮らし等、当時の人々の様子や思いを知ることで、改めて戦争や平和について考えるきっかけとなっています。戦後生まれの世代が大半を占める時代となり、また、戦争を体験した人たちの高齢化が進み、生の声で戦争の実情を知る機会がどんどん減ってきています。

子どもたちは、国語の「ちいちゃんのかげおくり（３年生）」「一つの花（４年生）」という物語を通して、戦時中の暮らしの様子や登場人物の心情を学習します。過去の戦争を知ることで、戦争の悲惨さや平和のありがたさを感じ取ってほしいと思います。

この夏、新宿の平和祈念展示資料館を見学しました。その資料館は、先の戦争における兵士やシベリア抑留者、海外からの引揚者に関する資料が数多く展示されており、資料の一つ一つから過酷な状況下での人々の暮らしや思いがひしひしと伝わってきました。映像による体験者の証言を聴き、戦争の悲劇、平和の尊さを改めて痛感しました。

資料館を見学しながら、私は、中学２年生の時、父と二人だけで過ごした夜のことを思い出していました。母が会社の旅行でひと晩留守にし、初めて父と二人だけで過ごした夜でした。

夕食が終わった後、父は「見せたいものがある。」と言い、１枚の写真を取り出してきました。その写真はすでにセピア色に染まり、そこには、若い頃の父が大勢の仲間と写っている姿がありました。

父はその写真を手にしながら、子どもの頃は満州で育ったこと、終戦後にシベリアに抑留されたこと、零下２０度、３０度の極寒の中で石炭を掘ったこと、写真に写っている仲間が病気や寒さのために死んでいったこと、引揚船から日本が見えたときには涙が止まらなかったことなどを話し始めました。

普段は口数が少なく、まして、戦争の話など一度もしたことがなかった父から初めて聞いたシベリアでの壮絶な抑留体験でした。最後に父は、しみじみと「平和っていいよなあ。」と言って話を終えました。

「平和っていいよなあ。」その言葉には、父が過去に背負ってきた深い悲しみや苦しみ、そして、今の平和のありがたさをかみしめる思いが凝縮しているようで、とても重い言葉に感じたことを覚えています。

父は、私が高校生の時に亡くなり、父からこの話を聞いたのは、あの夜が最初で最後となってしまいました。二人だけの夜に父がどんな思いで抑留体験を語ったのか、私に何を伝えたかったのか、今思い返すと、様々な感情が湧き起こってきます。

私にとって８月は、戦争や平和を強く意識し、より一層、世界の平和を願うときとなっています。

夏休みが終わり、子どもたちの元気な姿が学校に戻ってきました。子どもたちの声がはじけ、学校は子どもたちの明るい笑顔で満たされていきます。子どもたちが健やかに成長し、その笑顔が絶えることがないよう、平和が永遠であることを願わずにはいられません。

戦後７４年。今年の夏も父の墓前に手を合わせました。